

新の国 企業探訪

？ コミー株式会社

コミー株式会社は防犯用や安全確認用など特殊ミラーのトップメーカーとして知られている。これまでに航空機内の手荷物入れ確認ミラーや駅構内用の安全ミラーなど、画期的な製品を世に送り出してきた。今春にはプライバシーに配慮し、人の気配だけがわかる新製品「FFミラー気配」を発売したほか、既存のミラー製品とは全く異なる分野で、箸を使ったゲーム「箸タイム」を考案、世界市場を視野に発売した。面白い発想にこだわり続けることで新市場を切り拓くコミーの挑戦がますます期待されている。

転職を繰り返し、看板屋として起業する

コミーは、現社長の小宮山栄氏が1968年8月、28歳で東京都駒込に看板業「コミー工芸」として起業したことに始まる。小宮山社長は、信州大学工学部を卒業後、大手ベアリングメーカーに入社したが3年半で退職した。その後、転職を繰り返すものの、どの仕事も思うようにならず、最終的にたどり着いたのが看板屋としての“起業”だった。“シャッターに文字を書いたら飯を食べていける”。そんな話を耳にして、看板屋を職業として選んだという。



会社設立当時、東京・駒込のコミー工芸時代。車庫を改装した社屋はトイレもなく、夏の暑さはすさまじかったという。

看板製作からスタートして、商店や企業のシャッターに文字を書く仕事をする傍ら、1971年に新製品「回転装置」を開発した。街中を歩いていると、グルグルと回転する看板を目にすることがあるが、小宮山社長が発案（発明特許を取得）し製品化したものだ。製作した看板を回転装置に取り付けて回転させるというアイデア製品で、画期的なディスプレイ装置ということから、同社には次々に注文が舞い込んだ。この追い風に乗って1973年に会社はコミー工芸株式会社に法人化した。

同社は回転装置の製作で繁忙期を迎えていたが、ある時、知り合いが凸面ミラーを持って現れた。凸面ミラーを回して何かできないかという相手の相談を一度は断ったものの、周囲の景色が映りこんでいる凸面ミラーを見ているうちに、『このミラーを2枚合わせて回したら面白い！』と閃いた。早速、回転するミラーの開発に取り掛かり、10か月後に完成。「回転ミラックス」と名付けた。ミラーには電池とモーターが組み込まれていて、スイッチを引くと回転する仕組みになっていた。新製品を展示会「JAPAN SHOP'77」で試みに展示すると、意外にも「売ってくれないか」という人が現れ、30個注文した人がいて驚いた。



回転装置を用いたお馴染みの
回転看板（写真左）と
「回転ミラックス」（写真右）



納品して半年ほど経ったある日、納品した 30 個の回転ミラックスが気になった。後日、小宮山社長は一度に 30 個を購入したスーパー経営者を訪ねて聞いたところ、万引き防止にミラーを使用していたことが判明した。この予想外の売れ行きに、コミー工芸は、看板屋から次第にミラーメーカーへと業態変更していき、現在では、道路に設置されているカーブミラーなどを除いた特殊ミラーの分野では業界トップ企業に上り詰めていく。

航空業界に市場参入する

1995 年 11 月、羽田に向かう飛行機の手荷物入れを見て「こんなところにも FF ミラーがあったらいいな」と思った。航空業界に詳しい友人にサンプルを送り、その縁でエアバス A300 の内部を見学、現場でミラーが役立つか試させてもらった。「手荷物入れの確認作業を、確実に、楽にこなすことは私たち 10 年来の願い」とキャビンアテンダント（CA）の貴重な意見から、航空業界への参入に挑戦することとなった。



「FF ミラー AIR」
エアバス A350 の手荷物入れに
ミラーが設置されている。
©Charlie FURUSHO

当初、手荷物入れに取り付けるミラーの用途は乗客の忘れ物防止と考えていたが、CA が危険物の確認用にも使用していることが分かった。それまでは、CA が手荷物入れに忘れ物はないか、不審物がないかなど、いちいち手荷物入れを覗いて確認していた。しかし、ミラーを取り付けたことで一瞬で手荷物入れの中をチェックすることができ、大幅な作業時間の短縮につながった。後に「FF ミラー AIR」と名付けられた製品は、ナショナル・フラッグ・キャリアをはじめ世界中のエアライン 100 社以上に採用され、累計出荷枚数は 60 万枚を超え、日本国内で運航している 70% の航空機に設置されている。

また今から 7 年ほど前、日本航空の CA から要望を聞きながら携帯用コンパクトミラー「CA ミラー」の開発、供給を開始した。日本航空の CA はフライト前に「非常用機材のゲージ」の確認業務がある。ゲージが読みにくい場所がある時、このミラーを使って確認している。

また「持ち運びに便利でメイクチェックが簡単」「お客様との打ち合わせ前に身だしなみの確認ができる」「コンタクト使用時の目元確認」など日常生活にも使用できるという声をいただき、一般向けにも今年 3 月より販売、好評を得ている。

ユーザーに役立つオリジナル商品を開発、市場を開拓する

コミーはこれまでユーザーに役立つオリジナル商品を開発し、市場を開拓してきた。2021 年 5 月に発売した「FF ミラー気配」もその 1 つだ。これまでコミーが発売した従来の「FF ミラー通路」は、



「FF ミラー気配」



箸を使ったゲーム「箸タイム」

T字路やL字路での衝突の危険や不安を解消するミラーとして、オフィス、工場、病院、学校など、様々な施設に採用されてきた。特に、不特定多数の方が利用する商業施設などのトイレ周辺の通路は、普通の通路よりも狭く、衝突の不安な場所の一つとして「FF ミラー通路」が設置されてきた。

しかし、トイレ周辺の通路でミラーを試したユーザーから「見え過ぎて困る」との声があり、「人の気配だけの確認」ができるミラーを開発。プライバシーに配慮し、人の気配だけがわかるようFFミラーの鏡面に「ぼかし加工」を施した。

埼玉高速鉄道浦和美園駅など同社近隣の公共施設等のトイレ出入口にテスト設置をしたところ、「プライバシーに配慮され安全対策もできる」と好評を得た。さらに、その設置状況を見た商業施設にも採用された。



コミーではお昼休憩後に箸タイムを行っている (写真はコロナ前)

箸を使ったゲーム商品を開発

これまでミラーメーカーとして事業を展開してきたコミーだが、2020年3月、ミラーとは全く関係のない商品を開発し注目を集めている。それが箸ゲーム「箸タイム」だ。プラスチック製のピーナッツを箸でつまんで移動させて数を競う「箸ピー」と、つまむ、ひらくなど5種類の箸使いで、5つのリングを移動させて競う「箸リン」の2つのゲームがワンセットになっている。どちらのゲームも1分間で何個動かせるかを競うゲームである。「箸タイム」は小宮山社長が何年もかけて考案したもの。指先を上手に使う必要があることから、介護施設や高齢者福祉施設におけるリハビリテーションの一環として使えるほかレクリエーションにも適しているという。

小宮山社長は以前から箸に興味を持っていた。20年前には“箸を考える会”として「箸考会」を立ち上げたのに続いて、15年前には「国際箸学会」を設立し、箸に関係する行事や交流を行ってきた。「“箸を持つには、どんな持ち方があるのか”“箸で何ができるんだろうか？挟むこともできるし、ちぎることもできる”」。そうした思考を繰り返すうちに、“箸に摩擦を付けたら、どうなるのか”と考え、実際に箸に摩擦を付けて遊んでみたところ、「意外と面白い遊びができることが分かった」(小

宮山社長)。さらに考えを進化させるうちに、箸でピーナッツをつまむ競技を思いつき、11年前からゲーム化に取り組み始めた。その後、試行錯誤を繰り返してでき上がった試作品を2019年3月に行われた米国シアトルの桜まつりに持ち込んでテスト的に披露した。「参加者500人が次から次へと箸ゲームを経験し、皆がゲームを面白がってやってくれた。これは老若男女に喜ばれ世界中に広がるだろうということで2020年3月、箸タイムを発売した」と小宮山社長は振り返る。

このゲームの特徴は誰でも楽しくできる点で、「高齢者でも面白がってできるし、訓練すれば右利きでも、左手でできるようになる」(小宮山社長)ことに加えて、1分間でゲームが終了する気軽さが楽しめる魅力の1つになっている。実際、コミーでは毎日、昼休みの12時50分から1時5分まで、社員全員がこのゲームをやる。“位置について、用意スタート”の号令とともに、社員が一斉に箸でピーナッツを、1個ずつ右から左へと移動させる。1分間に何個移動できたかの結果は統計として記録し、社員は自身の記録を塗り替えようと日々、奮闘している。

しかし、何故、従来の事業とは異質の箸に興味を持ち、商品化まで実現したのか？この問いに小宮山社長は「箸に着眼したのは、日頃、日本人が誰でも使っているもので日本文化を代表するモノだから。箸という文化をどういう風にしたら、世

界中に自然に広げていくことができるのか。考えた結果がゲームにたどり着いた。こうした考え方はミラー製品の開発と同じです」と話す。ゲーム商品は発売したものの、慌てずにじっくり普及を目指していくという。

コミーは物語をつくる会社

コミーの製品開発の根底には「創造」や「発想」への独自のこだわりがある。メーカーである以上、モノをつくる喜びも大切だが、同社はそれ以上に、創造する喜びに着眼点を置いている。小宮山社長は常に考えてきた。“創造するには、どうしたらいいのか？”至った結論は、異質のもの同士が会うこと。異質なものが会えると、そこから新しい何かが生まれてくる。

小宮山社長はこうした考えを踏まえて自社のことを“物語をつくる会社”と例えてみせる。「何か新たな出来事が生まれると、そこから起承転結、文章を作っていく。コミーは物語をつくる会社なんです」とその意味を解き明かす。「これまで、鏡でも平らなのに視野が広い鏡が生まれたり、航空業界という全く違った文化に参入したり、異質なもの同士が会い、それが面白いと思えば開発に取り組んできた。その結果、気が付いてみたら世界初になっていた」(小宮山社長)とこれまでの事業を振り返る。技術立社ならぬ発想立社の姿勢を見せる同社の物語の続きが楽しみだ。

企業概要

コミー 株式会社

<https://www.komy.jp>

代表取締役社長 小宮山 栄

■創 業：1968年

■事業内容：防犯用をはじめ各種ミラー製品の
開発、製造、販売

■本 社：川口市並木 1-5-13

■電話番号：048-250-5311

■取 引 店：西川口支店

